

平成23年12月期 第4四半期 マイルストーン開示について

平成24年2月10日

上場会社名 カルナバイオサイエンス株式会社 (コード番号：4572 JQグロース)
 (URL <http://www.carnabio.com/>)
 問合せ先 代表取締役社長 吉野 公一郎
 取締役経営管理本部長 相川 法男 TEL：(078) 302 - 7075

平成23年2月10日発表のマイルストーン開示に係る事業計画、並びに平成23年8月5日、平成23年12月22日及び平成24年1月20日発表のマイルストーン開示に係る事業計画の修正に対する第4四半期末時点における達成状況及び今後の見通しについて、以下の通りお知らせいたします。

1. 第4四半期末時点における今期事業計画の達成状況の総括及び今後の見通し

(1) 全社の状況

平成23年12月期通期計画に対する通期実績は以下のとおりとなりました。

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成23年12月期 通期実績 (A)	592	△393	△340	△361
平成23年12月期 通期計画 (B)	586	△396	△342	△364
差異 (A)-(B)	+5	+2	+2	+3
平成22年12月期 通期実績 (C)	571	△398	△370	△397
差異 (A)-(C)	+20	+4	+29	+35

(2) 事業別の状況

(単位：百万円)

	売上高			営業利益		
	創薬支援事業	創薬事業	計	創薬支援事業	創薬事業	計
平成23年12月期 通期実績 (A)	567	25	592	71	△465	△393
平成23年12月期 通期計画 (B)	561	25	586	72	△468	△396
差異 (A)-(B)	+5	—	+5	△0	+3	+2
平成22年12月期 通期実績 (C)	543	27	571	59	△457	△398
差異 (A)-(C)	+23	△2	+20	+12	△7	+4

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

①創薬支援事業の状況

1) 当社製品・サービスの品揃えについて

第4四半期は、新規タンパク質製品として、キナーゼタンパク質1種類の製品化を完了し、販売を開始しました。その結果、販売を終了したものもあり、キナーゼタンパク質製品の数は、341種類と変更はありません。また、プロファイリング可能なキナーゼタンパク質の種類は311種類であります。また、第4四半期に販売を開始した物質間相互作用の研究に用いられるビオチン化キナーゼタンパク質の製品数は、新たに4種類を製品化し45種類となりました。

2) 地域別売上高について

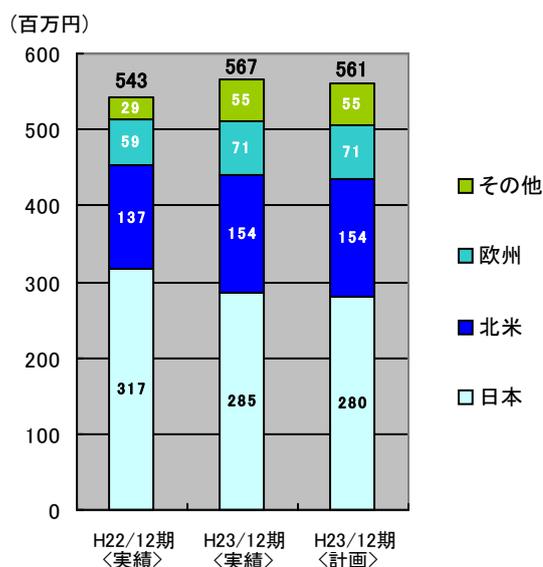
平成23年12月期通期の地域別売上高につきましては、次の通りとなりました。

海外売上上の売上全体に占める比率は49.6%（前連結会計年度は41.5%）と増加しました。

国内売上については、既存顧客への深耕等に努めたものの、リード探索サービスの協業先であったOSI Pharmaceuticals, Inc. が買収されたことに伴う減少並びに昨年3月の東日本大震災の影響等により前期実績317百万円を32百万円下回る285百万円となりました。

米国及び欧州については、円高、ドル安ユーロ安が大きく影響したものの学術営業や販売代理店網の整備等により着実に販売を伸ばした結果、米国の売上高は前期実績137百万円を16百万円上回る154百万円、欧州の売上高は前期実績59百万円を12百万円上回る71百万円となりました。

その他の地域については、前期実績29百万円を26百万円上回る55百万円となりました。



3) 顧客数について

平成23年12月期通期の取引顧客数は、当第4四半期において新たに国内で5、北米で11、欧州で6、その他地域で5、あわせて27の顧客から注文をいただいた結果、225となり、前期より47増加しました。

(単位：顧客数)

	国内顧客	北米顧客	欧州顧客	その他	合計
平成23年12月期通期(A)	62	94	52	17	225
平成22年12月期通期(B)	51	74	42	11	178
増減(A)-(B)	+11	+20	+10	+6	+47
平成23年12月期第3四半期累計	57	83	46	12	198

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

4) 製品別売上高について

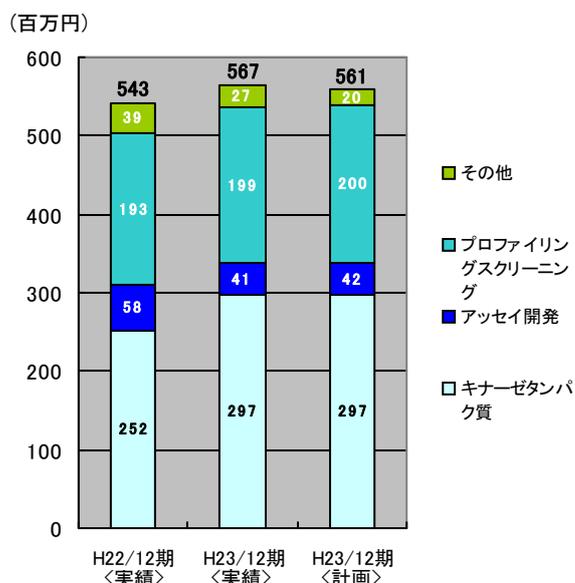
平成23年12月期通期の製品別売上高は次の通りであります。

キナーゼタンパク質については、前期実績を45百万円上回る297百万円となりました。これは主にアジア地域におけるバルクタンパク質の販売増によるものであります。

アッセイ開発については、前期実績を16百万円下回る41百万円となりました。

プロファイリング・スクリーニングサービスについては、前期実績を6百万円上回る199百万円となりました。これは、主に国内における本サービス売上が減少したものの、北米での売上が円高ドル安の影響により減少したにもかかわらずそれ以上に大幅増加したことによるものであります。

その他については、主にリード探索サービスの協業先であったOSI Pharmaceuticals, Inc. が買収されたことに伴い減少したものの、当社が代理店をしているACD社のチロシンキナーゼセルベースアッセイ受託サービスの売上が増加し始めたことから、前期実績を11百万円下回る27百万円となりました。



5) 今後の見通しについて

創薬支援事業の営業利益を拡大し、当社グループの継続的成長を図るためには、国内外での拡販や顧客層のさらなる拡大が重要であり、そのために顧客ニーズに基づいた製品・サービスメニューの拡充並びに高度化が重要であると認識しています。特に顧客から強い要望がある細胞を使ったキナーゼ阻害薬の評価系の技術開発、技術導入に注力して、早期の製品化を目指します。また、当社グループはこれまで蓄積してきたキナーゼタンパク質の製造方法やキナーゼ活性の測定方法（アッセイ条件）等の技術的ノウハウを活用して、効率的な製品の生産と製品レベルの一層の向上を図ってまいります。

②創薬事業の状況

1) 創薬事業における研究開発の状況

当社グループの創薬事業においては、ガン等重点疾患領域と位置づけ、キナーゼを標的とした創薬研究を精力的に進めてまいりました。その重点疾患領域であるガン領域では、独立行政法人国立がん研究センター及びSBIバイオテック株式会社との共同研究において、ステージアップを目指して、高次評価を実施してまいりましたが、化合物の見極めに伴う高次評価の遅延等から前臨床研究へのステージアップを達成することができませんでした。またアルツハイマー病等の神経変性疾患を治療する画期的な薬剤の開発を目指して、株式会社キノファーマとも順調に共同研究を進めてまいりました。その他の研究パイプラインに関しましても、研究パートナーとのアライアンスを活用する等、研究開発リソースを効率的に活用し研究を推進してまいりました。

当期におけるステージアップおよび研究テーマ数（実績と計画）

ステージアップ数	前臨床⇒臨床（又は導出）※			
	探索⇒前臨床（又は導出）※			1
研究テーマ数		5	5	5
		平成22年12月期 実績	平成23年12月期 実績	平成23年12月期 計画

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

※1. 上記における「計画通り」とは、研究プロジェクトが予期せぬ課題で中止されずに進行することを言います。創薬研究は個々の発明の連続であり、化合物群が合成され、これを評価してみないと研究の成否がわからないため、研究が一瞬にして飛躍的に進捗することあれば、予期せぬ課題により中断されることもあります。中断されることなく研究が継続されるということは、研究対象(テーマ)とする低分子化合物群について、将来の医薬品として継続的に費用をかけて研究開発してゆく判断を行ったことを意味し、当該テーマは科学的に考察した場合の実現可能性、中長期的な収支から見た場合の経済的合理性を持っているとの判断を行ったということです。中断すると判断した場合は、当該テーマに関して過去に投じた費用及びこれからかかる費用については、将来回収できないと判断したことを意味しますが、研究活動においては失敗も重要な知見であり、別のテーマでの知見の応用が可能な場合もあり、1テーマの研究の中断が企業の存続可能性に大きな影響を及ぼすかについては、個々のテーマの内容及び中断した時の科学的知見の状況、会社の経済的状況によりその影響度が異なります。

※2. ステージアップとは、研究テーマが「探索」から「前臨床(又は導出)」へ、又は「前臨床」から「臨床(又は導出)」へと、次段階の研究ステージに進むことを指します。

1. 「探索」から「前臨床」へのステージアップ

「探索」ステージ(=試験を行う創薬の標的となるキナーゼを同定し、多くの化合物の中から特定のキナーゼに対して阻害作用を持つ化合物(リード化合物)を創出し、そのリード化合物を基に種々の化合物を合成し医薬品として可能性のある化合物を選別するステージ)から、「前臨床」ステージ(=前臨床試験。臨床試験を開始する前に、新薬候補化合物を動物に投与して薬効と安全性を確認するステージ)に進むことが決定した状態。

2. 「探索」から「導出」へのステージアップ

「探索」ステージを終了した後、自社(又は他社と共同)で、その後の「前臨床試験」には進まずに、候補化合物を製薬会社等にライセンスアウトすることが決定した状態。

3. 「前臨床」から「臨床」へのステージアップ

「前臨床」ステージから「臨床」(=前臨床試験で薬効と安全性が認められた薬剤を実際にヒトに投与し、主作用と副作用を検討するステージ。臨床試験には第1相試験、第2相試験および第3相試験があります。)に進むことが決定した状態。

4. 「前臨床」から「導出」のステージアップ

「前臨床」ステージを終了した後、自社(又は他社と共同)で、その後の「臨床試験」には進まず、候補化合物を製薬企業等にライセンスアウトすることが決定した状態。

2) 今後の見通しについて

当社グループの創薬事業は、未だ有効な治療法が見つからない疾患におけるアンメット・メディカル・ニーズを充足させるために、ガン、リウマチ等の免疫炎症疾患及びアルツハイマー病等の神経変性疾患をテーマに創薬研究を行っております。今後も継続してガン領域を重点領域として研究リソースを集中的に投入してまいります。限りあるリソースの有効活用を図る目的から、研究開発テーマの優先順位を見直した結果、来期においてターゲットとするキナーゼの一部を変更することといたしました。新たにターゲットとして選定されたキナーゼはガン、免疫炎症疾患領域に深くかかわっているものであり、本テーマを含めて重点領域としている研究テーマについて早期ステージアップ及びパイプラインの強化を目指してまいります。また、重点領域以外のテーマにつきましても、研究パートナーとのアライアンスを有効に活用しながら、早期のステージアップを目指してまいります。さらにHTSで見出した有力なヒット化合物を早期にリード最適化段階にステージアップし、今後もガン領域の研究パイプラインの強化および早期導出を目指してまいります。

③研究開発費及び設備投資の状況について

平成23年12月期通期の研究開発費の状況及び設備投資の状況は以下の通りでした。

研究開発費は、創薬支援事業では主として新規タンパク質製品等の開発に資金を投じました。創薬事業では化合物の最適化研究や医薬品として適した特性を評価する試験(薬物動態試験等)の外部委託並びに創薬基盤技術の強化に資金を投じました。

設備投資については、創薬事業及び創薬支援事業における研究開発力の強化を目的とした機器等に資金を投じました。

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

(単位：百万円)

		平成23年12月期 通期 (実績)	平成23年12月期 通期 (計画)
研究開発費	創薬支援事業	3	2
	創薬事業	354	367
	計	358	370
設備投資		11	6

④人員について

平成23年12月期末の人員数は以下の通りです。

当社グループは、高い専門性、高い知見を有する即戦力のある経験者を中心に、人員の募集及び採用活動をホームページ及び採用アウトソーシングサービス並びにバイオテクノロジー関連の就職フェア等を活用して計画的に実施しております。

【人員数 (実績及び計画)】

	平成23年12月期 期末人員 (実績)	平成23年12月期 期末人員 (計画)
研究開発	32	35
営業	6 (4)	7 (3)

(注) 担当取締役を含み、臨時従業員は除く。()内は北米拠点における人員 (外数)。
研究開発には、生産技術部の人員を含む。

(3) その他

①資金計画について

(財務戦略)

当社グループは創薬支援事業と創薬事業という2つの事業を展開しておりますが、創薬事業を単独事業とする場合と比較して研究開発に係る資金負担が軽減されるよう、創薬支援事業において当社グループ製品・サービスの提供により獲得した資金を創薬事業に融通しております。

経営戦略上、財務体質の強化や中長期的な成長資金の追加確保等を目的とした資金調達の実現性が生じた場合には、事業の進捗状況や外部環境を勘案し、必要に応じて最適な方法・タイミングで資金調達を実施することといたします。なお、現在のところ、直接金融による資金調達の計画はございません。

(借入金)

当第4四半期連結会計期間において、特記すべき事項はございません。

②リスクについて

当社グループは、以下のリスク発生の可能性を勘案した上で事業計画及び業績目標を策定し、また当該リスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の対応に努める方針であります。当社株式に関する投資判断は、以下の記載事項及び本項以外の記載事項等を慎重に検討したうえで行われる必要があると考えております。

- ・創薬支援事業は、主としてキナーゼを対象とした製品・サービス構成となっているため、キナーゼ阻害薬の研究開発を進める製薬企業の減少により、業績等に影響を及ぼす可能性があります。また、予想どおりキナーゼ阻害薬の研究開発に関連したアウトソースの市場が拡大しない場合は、業績等に影響を及ぼす可能性があります。
- ・製薬業界は合従連衡が盛んであり、研究テーマが変更される可能性があります。その結果、キ

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

ナーゼ研究が拡大する場合も縮小する場合も考えられ、縮小した場合は、業績等に影響を及ぼす可能性があります。

- ・顧客である製薬企業の創薬研究は、秘匿性が高く、またその進捗により研究テーマ自体が変更となることがあるため、年間ベースでの受注契約（年間契約）が締結できた場合でも、顧客の研究が予定通りに進まない場合等により、年間契約の獲得件数の増加がただちに収益に寄与しないことが考えられます。特に欧米企業では、研究テーマ数が日本と比較して多く、市場規模が大きい反面、個々の顧客における研究テーマの変更も大きく、新規顧客の開拓が、直ちに収益に寄与しないことが考えられます。
- ・米国内に販売子会社を設け、北米での創薬支援事業の売上拡大を図っております。しかしながら、北米でのキナーゼタンパク質販売やプロファイリング・スクリーニングサービスの提供等は販売競争が激しいため、予測どおり当社のシェアが拡大できず、業績等に影響を及ぼす可能性があります。
- ・連結売上高に占める海外売上高の割合は47.5%となっております。当社グループは、米国及び欧州等の海外の製薬企業を顧客とするグローバルな販売活動を展開しており、これに伴い、米ドル等の外貨で売上が計上されますが、大きく為替相場が変動することにより業績等に影響を及ぼす可能性があります。
- ・競合他社がキナーゼタンパク質やプロファイリング・スクリーニングサービス等を提供する種類を増やし、当社グループのみが販売している製品、サービスの数が減少または無くなる可能性があります。また、複数の同業他社の参入にともなう価格競争等により業績が悪化する場合があります。
- ・競合他社が画期的な技術で当社グループより先行した場合は、当社グループの優位性が低下する可能性があります。また、これらの競争に対応するために、当社グループの事業展開において、想定以上の資金が必要となる可能性があります。
- ・創薬における研究開発のスピードが年々速まっており、当社グループは積極的な研究開発投資、優れた技術をもつ企業との提携、最先端技術への対応を進めていますが、その対応に想定以上の資金が必要となる可能性があります。また、その対応に遅れた場合、業績等に影響を及ぼす可能性があります。
- ・医薬候補化合物の導出には、製薬企業等との間で諸条件について取り決め、契約を締結する必要があるため、双方の条件に隔たりがあり、想定どおり契約ができない場合は、当社グループの業績等に影響を及ぼす可能性があります。
- ・協業相手と当社グループとの事業シナジーを創出するためには、技術面での補完関係が前提となりますが、双方の技術開発の進捗が揃わない場合は、製品化、サービス化が遅れ、業績等に影響を及ぼす可能性があります。
- ・他の企業等との共同研究において、研究の進捗により協力金等の収入を得ることがありますが、研究の進捗が、必ずしも想定どおりに進展しない場合等、直ちに収益に寄与しないことが考えられます。

以 上

【ご参考】

- ①マイルストーン開示に係る事業計画について（平成23年12月期～平成25年12月期）
平成23年2月10日開示
- ②マイルストーン開示に係る事業計画の修正について（平成23年12月期～平成25年12月期）
平成23年8月5日開示
- ③マイルストーン開示に係る事業計画の修正について（平成23年12月期～平成25年12月期）
平成23年12月22日開示
- ④マイルストーン開示に係る事業計画の修正について（平成23年12月期～平成25年12月期）
平成24年1月20日開示

本開示資料は、投資者に対する情報提供を目的として将来の事業計画等を記載したものであって、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。

また、当社は、事業計画に関する業績目標その他の事項の実現・達成等に関しその蓋然性を如何なる意味においても保証するものではなく、その実現・達成等に関して一切責任を負うものではありません。

本開示資料に記載されている将来に係わる一切の記述内容（事業計画に関する業績目標も含まれますがそれに限られません。）は、現時点で入手可能な情報から得られた当社の判断に基づくものであり、将来の経済環境の変化等を含む事業計画の前提条件に変動が生じた場合その他様々な要因の変化により、実際の事業の状態・業績等は影響を受けることが予想され、本開示資料の記載内容と大きく異なる可能性があります。

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

マイルストーン開示に係る事業計画について
(平成23年12月期～平成25年12月期)

平成23年2月10日

上場会社名 カルナバイオサイエンス株式会社 (コード番号：4572 JQグロース)
(URL <http://www.carnabio.com/>)

問合せ先 代表取締役社長 吉野 公一郎
取締役経営管理本部長 相川 法男

TEL：(078) 302 - 7075

1. 今後の業績目標 (平成23年12月期～平成25年12月期)

(1) 売上・損益目標

1) 全社

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成22年12月期 (実績)	571	△398	△370	△397
平成23年12月期 (計画)	770	△254	△200	△221
平成24年12月期 (目標)	1,150	9	25	23
平成25年12月期 (目標)	1,600	317	333	331

(注) 平成23年12月期は経営計画にもとづき費目毎に予測金額を積み上げた計画値、平成24年12月期以降は市場環境や企業規模の拡大見通し等を加味した推計値を記載しております。

(参考) 前回のマイルストーン開示に係る事業計画 (平成23年1月21日開示)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成23年12月期 (目標)	770	△254	△200	△221
平成24年12月期 (目標)	1,150	9	25	23

2) 事業別

(単位：百万円)

	売上高		営業利益	
	創薬支援事業	創薬事業	創薬支援事業	創薬事業
平成22年12月期 (実績)	543	27	59	△457
平成23年12月期 (計画)	650	120	138	△392
平成24年12月期 (目標)	750	400	232	△222
平成25年12月期 (目標)	900	700	346	△28

(参考) 前回のマイルストーン開示に係る事業計画 (平成23年1月21日開示)

	売上高		営業利益	
	創薬支援事業	創薬事業	創薬支援事業	創薬事業
平成23年12月期 (目標)	650	120	138	△392
平成24年12月期 (目標)	750	400	232	△222

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

(2) 各事業年度における売上・損益目標の説明

1) 平成23年12月期：

平成23年12月期は、景気の回復基調はみられるものの依然継続すると思われる日米欧での不透明な経済情勢のなかで、大型医薬品の特許切れが製薬企業の収益を圧迫し、大型新薬候補ターゲットに対する関心は一段と高まるものと想定されますが、製薬企業等での研究開発方針の変動リスクや予算執行に係る停滞リスクは引き続き高いものと考えられます。当該事項及び前期実績を総合的に勘案し、平成23年12月期の売上高は前期実績より198百万円増加の770百万円（前回開示した修正事業計画と同額）を計画しております。創薬支援事業の売上高については、国内での高付加価値サービスの提供や欧米での当社製品の認知度向上等により、前期実績より106百万円増加の650百万円を計画しております。創薬事業の売上高については、前期から継続的に交渉を行っている新薬候補化合物の早期導出等による収入により、前期実績よりも92百万円増加の120百万円を計画しております。

損益については、上述の売上高の増加を見込むとともに、事業の効率化による経費節減等に取り組むことにより、営業損失、経常損失及び当期純損失は前年実績に比べそれぞれ144百万円、169百万円、176百万円改善した、各々254百万円、200百万円、221百万円を計画しております。

なお、この損益の見通しにおいては、独立行政法人国立がん研究センター（以下「国立がん研究センター」という）との共同研究が、独立行政法人医薬基盤研究所（以下「基盤研」という）の運営する「保健医療分野における基礎研究推進事業」の「平成22年度新規研究プロジェクト」に採択されたことによる補助金収入を織り込んでおります。

2) 平成24年12月期：

平成24年12月期においても、平成23年12月期同様の事業環境が継続するものと予測しており、前述の諸リスクが当社グループの損益に与える影響は依然大きいものと考えておりますが、製薬企業における新薬開発競争は一段と激しさを増しているとの見通しから、創薬支援事業における当社の製品、サービスの需要は一層高まるものと考えております。同時に、創薬事業における研究開発テーマの着実な進捗、それと並行して積極的に行ってまいります製薬企業への導出交渉の進展等を総合的に勘案して、平成24年12月期の売上高は平成23年12月期計画より380百万円増加の1,150百万円（前回開示した修正事業計画と同額）を計画しております。創薬支援事業の売上高については、平成23年12月期計画より100百万円増加の750百万円、創薬事業の売上高については、平成23年12月期計画よりも280百万円増加の400百万円を計画しております。

損益については、当期における全社黒字化を計画しており、営業利益、経常利益及び当期純利益は各々9百万円、25百万円、23百万円を目標としております。

なお、この損益の見通しにおいては、国立がん研究センターとの共同研究が基盤研の運営する「保健医療分野における基礎研究推進事業」の「平成22年度新規研究プロジェクト」に採択されたことによる補助金収入を織り込んでおります。

3) 平成25年12月期：

平成25年12月期については、依然キナーゼに係る創薬関連ビジネスの需要は高いとの見通しから、当社グループの事業規模は継続的に拡大するものと想定しております。また、平成24年12月期までに製薬企業等に導出した新薬候補化合物に係るマイルストーン収入も想定できることから、これらを総合的に勘案し、平成25年12月期の売上高は平成24年12月期計画より450百万円増加の1,600百万円を目標としております。創薬支援事業の売上高は平成24年12月期計画より150百万円増加の900百万円を目標としております。他方、創薬事業の売上高は、平成24年12月期計画より300百万円増加の700百万円を目標としております。

損益については、創薬支援事業による安定的な利益確保及び創薬事業での安定的な収入により、営業利益、経常利益及び当期純利益は黒字が継続するとともに、平成24年12月期計画より利益の上積みを図り、それぞれ317百万円、333百万円、331百万円を目標としております。

なお、この損益の見通しにおいては、国立がん研究センターとの共同研究が基盤研の運営する「保健医療分野における基礎研究推進事業」の「平成22年度新規研究プロジェクト」に採択されたことによる補助金収入を織り込んでおります。

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

2. 各事業年度の計画達成のための前提条件に係る事項

(1) マイルストーン開示に係る事業計画策定の背景・中期的ビジョン

- ・当社は、平成15年4月、オランダの製薬企業である日本オルガノン株式会社からのスピンオフベンチャーとして神戸市に設立されました。創業以来、キナーゼ^(注1)をターゲットとした新薬の研究にかかわる製品及び受託サービス(創薬^(注2)支援事業)を国内外の製薬企業等に提供するとともに、自社研究及び他社との共同研究等を通じて主体的に新薬研究(創薬事業)を進めております。
- ・細胞内の情報伝達を司るキナーゼと呼ばれる酵素は、ガンの異常な細胞増殖、関節リウマチ等の炎症性疾患、アルツハイマー等の神経変性疾患等に深くかかわっていると考えられており、当社グループはキナーゼの活性を阻害するキナーゼ阻害薬を創製するための基盤となる技術である「創薬基盤技術」をベースに事業展開しております。
- ・従来の治療薬と比較して、異常をきたしたキナーゼだけを狙い撃ちするキナーゼ阻害薬は、治療効果が高く、また副作用が少ないと考えられていることから、分子標的薬の代表的な治療薬として世界各国で注目を集めています。現在、世界の新薬研究の約30%はキナーゼをターゲットとしており^(注3)、130種類以上のキナーゼ阻害薬の臨床試験が進められるなか、治療効果の高いキナーゼ阻害薬が世の中に出始めております^(注4)。分子標的治療の市場は2005年の75億米ドルから2015年までに225億米ドルに拡大し、抗がん剤の65%を占めるまで成長すると予想されています^(注5)。また、キナーゼを標的とした薬剤市場は年率18%で成長し、2008年130億米ドルだった市場が2013年には350億米ドルに成長すると予測されています^(注6)。さらにキナーゼタンパク質をターゲットとしたプロファイリング・スクリーニングサービス^(注7)の全世界での市場規模は、製薬企業の自社内実施分として2010年で50百万米ドルが2012年では65百万米ドルに拡大するとともに、社外委託分として2010年で51百万米ドルが2012年では56百万米ドルに拡大すると予測されています^(注8)。

【当社グループの事業概要】



これらのことから、キナーゼ関連市場におけるキナーゼ関連試薬及びプロファイリング・スクリーニングサービス等の需要は堅調であると考えられます。また、大型医薬品(ブロックバスター)の特許切れが相次いでいる2010年問題が大手製薬企業等の利益を圧迫するなかで、後続の大型新薬の開発ニーズはますます高まってきており、新薬企業各社は研究開発の効率化を

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

目的とした自社研究範囲の選択と集中を図っており、研究開発プロセスのアウトソーシング化はさらに進むものと予測されます。一方、大手製薬企業等による新薬候補パイプラインの獲得を目的としたバイオベンチャー企業の買収等も一段と激しさを増しており、当社が研究開発を行い、大手製薬企業等へ導出を目指しているキナーゼを標的とした新薬候補化合物への関心はますます高まるものと予測されます。

なお、上記ならびに下記に述べる計画を達成するにあたり、当社グループは以下を課題として認識し、今後対処すべきと考えております。

- 1) 製品数の増加や多様な顧客ニーズに対応するためのキナーゼタンパク質の生産性の向上やプロファイリング・スクリーニングサービスの処理能力の向上に努めてまいりましたが、今後は、より一層効率性の高いタンパク質の生産やプロファイリング・サービスが実施できるよう、システムを改良していくことが課題です。引き続き顧客の視点に立った高品質の製品・サービスの提供ならびに製品提供後のフォロー体制の強化を推し進めてまいります。
- 2) 今後、国内外でのキナーゼタンパク質やプロファイリング・スクリーニングサービスの拡販や顧客層の更なる拡大を図るためには、顧客ニーズに基づいた製品・サービスメニューの拡充が課題です。このため、当社グループは、顧客ニーズに対応した製品・サービスメニューの拡充に重点をおいて研究開発を進めてまいります。また、当社グループがこれまで蓄積してきたキナーゼタンパク質の製造方法やキナーゼ活性の測定方法（アッセイ条件）などの技術的ノウハウを活用して、効率的な製品の生産と製品レベルの一層の向上を図ってまいります。

(注) 当社グループの保有する多くの技術的ノウハウが、技術革新等により陳腐化した場合、また、第三者によって技術的ノウハウが先行的に特許出願され、権利化された場合、当社グループの技術の優位性が損なわれ、創薬支援事業の業績に影響が生じる可能性があります。

- 3) 平成21年12月期に合成研究施設が本格稼動し、化合物の合成スループットが飛躍的に向上したことから、引き続き精力的に創薬研究を実施してまいりますが、創薬という非常に予測が難しい事業をいかに短期間で安定した事業にすることができるかが当面の課題です。つまり創薬の特性上、研究開発が高ステージになればなるほど高収益が見込まれますが、その反面、失敗する確率も高くなります。逆に早期に導出することは比較的容易ではありますが、収益はその分低くなる可能性があります。これらのことから、早期導出プログラムと自社開発プログラムの推進の最適化を図り、前臨床及び臨床試験へのステージアップだけでなく、早期に大手製薬企業等への導出を実現し、創薬に係る収益基盤の早期安定化を図ってまいります。

(注) 医薬候補化合物の導出には、製薬企業等と導出に係る諸条件について取り決め、契約を締結する必要があるため、双方の条件に隔たりがあり、当社グループの想定通り契約ができない場合は、当社グループの収益に直ちに寄与しないことが考えられます。

- 4) キナーゼに関わる多様な技術を保有する当社グループと、他の企業や研究機関等との協業による新たな製品・サービスの開発、更に当社グループの研究開発の成果に付加価値をもたらすような事業機会の増加、及び創薬事業の進展に寄与する共同研究等を推進していくことが課題です。そのために社外の様々なネットワークを駆使した新たな提携関係の構築や既存提携先との関係強化を、キナーゼ周辺技術を中心に推進してまいります。

(注) 協業相手と弊社との事業シナジーを創出するには、技術面での補完関係を前提としますが、双方の技術開発の進捗が揃わない場合は、製品化・サービス化が遅れ、当社グループの収益に直ちに寄与しないことが考えられます。

- 5) 創薬支援事業において、世界最大市場である米国及び欧州市場でのシェア拡大が課題だと認識しております。米国での既存顧客との関係強化及び新規顧客の開拓を目的に、平成20年4月米国子会社を設立して以来、積極的に営業活動を進めており、さらなる知名度の向上を図り、市場シェア拡大を目指してまいります。そのためにも、より多くの顧客に当社の製品・サービスの情報をタイムリーに提供し、顧客の求めている技術支援の

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

ニーズを的確に把握することで、売上増加を目指してまいります。顧客からの技術的な問い合わせが増加していることから、学術要員を欧米に派遣し、顧客の要望に迅速に応える体制を整備してまいります。また、中国、インド、韓国、シンガポール等の創業において成長著しい市場に対しては、現地販売代理店の活用を中心に、売上の拡大を図ってまいります。国内における当社グループの認知度は高いものの、さらなる顧客支援の機会の創出を目指し、既存顧客との深耕を一層進めてまいります。

(注) 製薬業界は合従連衡が盛んであり、研究テーマが変更される可能性があります。その結果、キナーゼ研究が拡大する場合も縮小する場合も考えられます。縮小した場合には、当社グループの収益に直ちに寄与しないことが考えられます。

(2) マイルストーン開示に係る事業計画の概要

① 創薬支援事業

主力の製品・サービスである、キナーゼタンパク質、アッセイ開発（アッセイキット^(注9)）及びアッセイ系開発サービス）、プロファイリング・スクリーニングサービスの提供・販売の拡大を目指します。

創薬支援事業の売上拡大において重要である欧米での売上拡大を達成するために、当社グループの製品・サービスの認知度向上、顧客数の増加並びに既存顧客への深耕を進めます。その方策として、当社グループの製品・サービスの広告宣伝を積極的に行うとともに、顧客との接触頻度の増加を図ります。また、提案型営業を推進するための学術要員を配置し、顧客からの問い合わせ等に的確に応えていくことで、顧客からの信頼を高め、他社との差別化を図ってまいります。

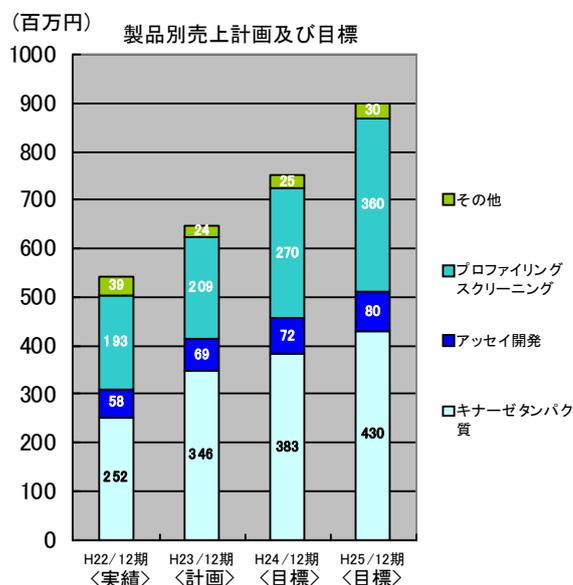
(注) 当社グループの顧客である製薬企業の創薬研究は、秘匿性が高く、その進捗により研究テーマ自体の変更が起り得るために、顧客の研究が予定通りに進まない場合など、営業活動の積極的展開が当社グループの収益に直ちに寄与しないことが考えられます。特に欧米企業では、研究テーマが日本と比較して多くかつ市場規模が大きい反面、個々の顧客における研究開発方針の変化も大きく、新規顧客の開拓が、当社グループの収益に直ちに寄与しないことが考えられます。

1) 製品別売上計画及び目標について

製品別売上では、キナーゼタンパク質の販売とプロファイリング・スクリーニングサービスの提供の拡大が重要であると考えております。

キナーゼタンパク質の拡販では、世界で最も多種を供給できるキナーゼタンパク質をさまざまな用途で使用していただくべく提案型営業を推進してまいります。さらに、昨年から販売を開始したビオチン化蛋白は、従来のアッセイ用キナーゼタンパクとは異なり、特異性の高い化合物創出における試薬として新たな市場を開拓するものと考えられるため、顧客要望を積極的に取り込み拡販に努めてまいります。

プロファイリング・スクリーニングサービスの提供の拡大では、顧客からの低価格化とリードタイム短縮要求に対応するために、現有設備と人員にもとづく、より効率的なシステム構築に向けての対応を進めております。

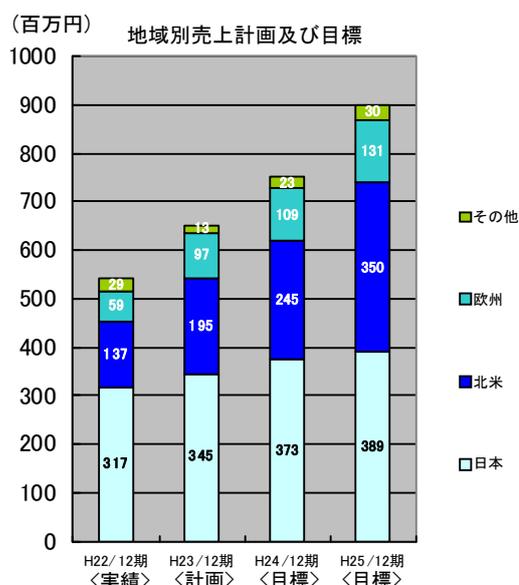


本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

2) 地域別売上計画及び目標について

地域別売上では、世界最大市場である米国及び欧州市場でのシェア拡大に取り組んでまいります。当社グループの製品・サービスの認知度向上、顧客数の増加並びに既存顧客への深耕を進めるために、製品・サービスの広告宣伝、PRを積極的に行うとともに、学術要員による技術的な問合せ対応、サポート力を向上することで、欧米での売上増加を図ってまいります。

国内売上においては、地の利を活かした付加価値サービスの提案により、更に顧客に密接したサービス提供で売上増加を図ってまいります。



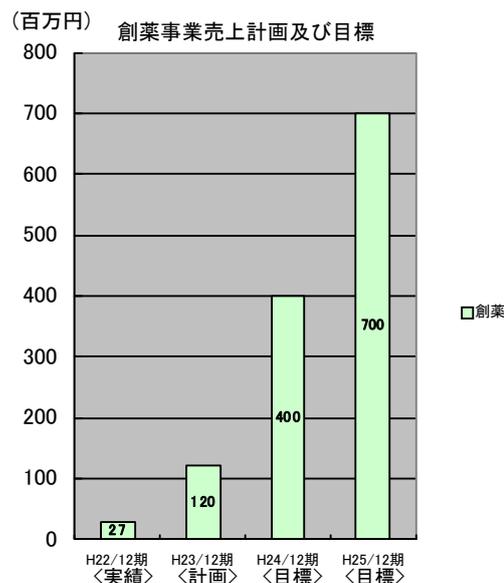
② 創薬事業

創薬事業におきましては、導出交渉の進展のために事業開発機能を強化しており、製薬企業等との導出契約等の締結に基づく一時金等により、平成23年12月期での売上計上を目指します。平成24年12月期及び平成25年12月期につきましては、導出に係る契約一時金等に加え、導出予定テーマに係るマイルストーン収入を見込んでおります。

研究パイプライン

キナーゼ	対象疾患	研究パートナー
SYK	リウマチ	クリスタルゲノミクス社(韓国)
DYRK1A	神経変性疾患	
TNIK	ガン	独立行政法人国立がん研究センター
CDC7/ASK	ガン	SBIバイオテック株式会社
キナーゼD	免疫炎症疾患	科研製薬株式会社

(注) 共同研究では、研究の進捗により協力金などの収入を得ることが出来ませんが、研究の進捗が、必ずしも当社グループの想定通りに進展しない場合など、当社グループの収益に直ちに寄与しないことが考えられます。



(3) マイルストーン開示に係る事業計画達成のための基本方針

① 創薬支援事業

- 新規顧客の開拓及び売上の拡大に努めます。

【平成22年12月期の取引社数】

(単位：社)

日本顧客	北米顧客	欧州顧客	その他	合計
51	74	42	11	178

- 米国及び欧州を中心に営業力の強化を図ります。
- 顧客要望に基づく製品・サービスメニューの拡充に重点を置いて研究開発を進めてまいります。

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

- ・製品・サービスの生産能力、処理能力の向上と品質の更なる向上を図ります。

② 創薬事業

- ・当社グループが保有する創薬基盤技術を駆使して、効率的な創薬を目指します。
- ・キナーゼ阻害薬の新薬候補化合物を創製し、早期導出を目指します。

(4) マイルストーン開示に係る事業計画達成のための営業、研究開発等の組織体制、財務政策、今後の展望

① 組織体制

- ・組織体制については、当社グループの企業価値を向上すべく、研究開発力及び営業力の強化を図ることを目的に、優秀な研究員等の計画的かつ継続的な採用及び教育が重点課題であると考えております。
- ・研究開発における人員計画については、平成23年12月期に創薬事業においてガン化モデル動物（担ガンマウス）評価等の薬理基盤を強化する目的から2名の研究員の増員を計画しております。平成24年12月期には創薬事業における「探索⇒前臨床（又は導出）」へのステージアップに伴う前臨床試験のマネージメント要員1名の増員を計画しております。
- ・営業における人員計画については、現有勢力を総動員し、拡販に努めてまいります。

【人員計画】

(単位：人)

	平成23年12月期	平成24年12月期	平成25年12月期
研究開発	35	36	36
営業	7 (3)	7 (3)	7 (3)

(参考) 前回のマイルストーン開示 (平成22年2月19日開示)

	平成23年12月期	平成24年12月期
研究開発	32	32
営業	7 (3)	7 (3)

注) 担当取締役を含む。() 内は北米拠点における人員 (外数)。

② 財務政策

- ・当社グループは創薬支援事業と創薬事業という2つの事業を展開しておりますが、創薬事業を単独事業とする場合と比較して研究開発に係る資金負担が軽減されるよう、創薬支援事業において当社グループ製品・サービスの提供により獲得した資金を創薬事業に融通しております。経営戦略上、財務体質の強化や中長期的な成長資金の追加確保等を目的とした資金調達必要性が生じた場合には、事業の進捗状況や外部環境を勘案し、必要に応じて最適な方法・タイミングで資金調達を実施することといたします。なお、現在のところ、直接金融による資金調達の計画はございません。

3. プロジェクト毎の研究開発計画

(1) 創薬支援事業における研究開発計画

現在、キナーゼ阻害薬の創薬の研究ターゲットとされているキナーゼのほとんどが、当社では既に製品化が完了しておりますので、今後開発が可能な研究ターゲットとなるキナーゼは少ないものと考えております。このため、キナーゼの種類数を増加させることを第一義的な目的とするのではなく、顧客ニーズや最新の創薬研究技術に基づいた製品・サービスの拡充を目指します。

製薬企業等におけるキナーゼ阻害薬の創薬研究は、キナーゼの活性を阻害する化合物を見出すことから開始されます。化合物によるキナーゼの阻害には、化合物が活性のあるキナーゼに結合してその活性を阻害する方法と、活性のないキナーゼに結合してキナーゼの活性化自身を阻害する方法があります。前者のアッセイには活性のあるキナーゼ、後者のアッセイには活性のないキナーゼが必要とされます。近年、顧客ニーズが活性のないキナーゼを用いたアッセイにおいても高くなってきており、それらに利用可能な結合アッセイ用タンパク質の開発を今後も積極的に行ない、製品数の増加を図ります。加えて、脂質キナーゼや結晶化

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

用タンパクの開発など、他の創薬基盤技術の開発を推進したいと考えております。

(2) 創薬事業における研究開発計画

当社グループの創薬事業は、創薬研究力の強化と開発の迅速化に取り組むことで、画期的な新薬を一日でも早く世に送り出すことを目指しています。最適化研究では、選択と集中によりガンを重点領域とした研究開発方針に変更し、ガン領域以外の創薬プログラムの再編を進めております。最適化研究で得られた化合物を迅速にステージアップさせるためには詳細な薬理評価が重要となるため、多種にわたるガン細胞評価系、ガン化モデル動物評価などの薬理基盤強化を計画しております。またガン以外の疾患領域につきましては、戦略的アライアンスを積極的に推進するとともに、比較的资源負担が少なく、当社グループ基盤技術であるキナーゼプロファイリングを最大限に活用できるリード創出段階での早期導出戦略に切り替え、リスクを抑えながら早期に収益化してまいります。

このような重点領域の見直しに伴い、平成23年12月期以降の研究開発計画を以下の通りいたしました。平成23年12月期には、1テーマについて「探索⇒前臨床（又は導出）」へステージアップを計画しております。また平成24年12月期には、2つの前臨床候補化合物の選抜及び1つの臨床試験開始を計画しております。平成25年12月期においても、2つの前臨床候補化合物の選抜及び1つの臨床試験開始を計画しております。

ステージアップ及び研究テーマ数の計画及び目標

ステージアップ数	前臨床⇒臨床（又は導出）※		1	1
	探索⇒前臨床（又は導出）※	1	2	2
研究テーマ数		5	5	5

平成23年12月期 平成24年12月期 平成25年12月期

(参考) 前回のマイルストーン開示 (平成23年1月21日開示)

ステージアップ数	前臨床⇒臨床（又は導出）※		1
	探索⇒前臨床（又は導出）※	1	2
研究テーマ数		5	5

平成23年12月期 平成24年12月期

※1. 当社グループの創薬研究はキナーゼをターゲットとした低分子創薬であります。合成された低分子化合物群を評価してみないと研究の成否がわからないため、研究が一瞬にして飛躍的に進捗することもあれば、予期せぬ課題により中断されることもあります。中断されることなく研究が継続されるということは、研究対象(テーマ)とする低分子化合物群について、将来の医薬品として継続的に費用を投入して研究開発していく判断を行ったことを意味し、当該テーマについて科学的に考察した場合の実現可能性、中長期的な収支から見た場合の経済的合理性を持っているとの判断を行ったということでもあります。中断すると判断した場合は、当該テーマに関して過去に投じた費用及びこれからかかる費用については、将来回収できないと判断したことを意味しますが、研究活動においては失敗も重要な知見であり、別のテーマでの知見の応用が可能な場合もあり、1テーマの研究の中断が企業の存続可能性に大きな影響を及ぼすかについては、個々のテーマの内容及び中断した時の科学的知見の状況、会社の経済的状況によりその影響度が異なります。

※2. ステージアップとは、研究テーマが「探索」から「前臨床（又は導出）」へ、又は「前臨床」から「臨床（又は導出）」へと、次段階の研究ステージに進むことを指します。

1. 「探索」から「前臨床」へのステージアップ

「探索」ステージ(=試験を行う創薬の標的となるキナーゼを同定し、多くの化合物の中から特定のキナーゼに対して阻害作用を持つ化合物(リード化合物)を創出し、そのリード化合物を基に種々の化合物を合成し医薬品として可能性のある化合物を選別するステージ)から、「前臨床」ステージ(=前臨床試験。臨床試験を開始する前に、新薬

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

候補化合物を動物に投与して薬効と安全性を確認するステージ)に進むことが決定した状態。

2. 「探索」から「導出」へのステージアップ

「探索」ステージを終了した後、自社(又は他社と共同)で、その後の「前臨床試験」には進まずに、候補化合物を製薬会社等にライセンスアウトすることが決定した状態。

3. 「前臨床」から「臨床」へのステージアップ

「前臨床」ステージから「臨床」(=前臨床試験で薬効と安全性が認められた薬剤を実際にヒトに投与し、主作用と副作用を検討するステージ。臨床試験には第1相試験、第2相試験及び第3相試験があります。)に進むことが決定した状態。

4. 「前臨床」から「導出」のステージアップ

「前臨床」ステージを終了した後、自社(又は他社と共同)で、その後の「臨床試験」には進まず、候補化合物を製薬企業等にライセンスアウトすることが決定した状態。

(3) 研究開発費及び設備投資に関する計画

研究開発費については、主にキナーゼ阻害薬の候補化合物のステージアップや製薬企業への早期導出を実現することを目的として計画的に投入し、効率的に活用してまいります。

設備投資については、当面の研究開発、製造等に必要な設備の導入は概ね完了したことから、重要な設備投資は計画しておりません。

なお、本計画においては、基盤研の補助金制度を活用し、国立がん研究センターとの共同研究で使用する消耗品の調達、外注試験を実施する予定であります。

(単位：百万円)

		平成23年12月期	平成24年12月期	平成25年12月期
研究開発費	創薬支援事業	2	1	1
	創薬事業	367	473	576
	計	370	475	577
設備投資		6	0	0

(参考) 前回のマイルストーン開示に係る事業計画(平成23年1月21日開示)

		平成23年12月期	平成24年12月期
研究開発費	創薬支援事業	2	1
	創薬事業	367	473
設備投資		6	0

【注釈】

(注1) 「キナーゼ」とは、タンパク質分子にリン酸基を付ける機能(リン酸化機能)を持つ酵素群で、現在ヒトには518種類存在することが知られています。キナーゼは細胞内において、細胞の増殖、移動、分化等、いろいろな指令を伝える役割を持っています。当社グループでは、キナーゼが酵素(タンパク質性触媒)であることから、キナーゼタンパク質と呼称し、製造・販売しています。

(注2) 「創薬」とは、製薬企業が新薬を研究・開発し、その有効性・安全性を確かめて医薬品として承認申請を行い、国の製造販売承認を経て上市し、市販後調査を終了するまでの過程をいいます。

(注3) ‘Protein Kinases: Technologies and Opportunities for Drug Discovery’, Drug & Market Development Publications, 2007

(注4) Insights Pharma Reports版 2008.8
Gleevec® (Novartis AG)、 Tarceva® (Genentech, Inc.、Roche Holding AG.、OSI Pharmaceuticals, Inc.)、 Nexavar® (Bayer AG、Onyx Pharmaceuticals, Inc.)、 Sutent™ (Pfizer Inc.、SUGEN, Inc.) などがすでに世の中に出ています。

(注5) ‘Pipeline/Commercial Insight: Molecular Targeted Cancer Therapies - More drugs on the market, more targets in the pipeline’ /Datamonitor Corporation版
「英Datamonitor社の調査資料」日経バイオテク2009.7.20

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

(注6) ” Report identifies 608 protein kinase drugs under development from 232 originating companies during the last decade, approvals for several first-in-class kinase inhibitors have resulted in a wider recognition of kinases as an important class of drug targets.” Published on July 30, 2009/ 「OFFICIAL SPIN 2009年7月30日掲載文」

(注7) 医薬品開発の領域で用いられるプロファイリングとは、医薬品候補化合物が種々の生体内物質や生体内反応に及ぼす影響をできる限り網羅的に調べ、明らかにすることです。これを行うことで医薬品候補化合物の副作用を予見できる場合があります。スクリーニングとは、多くの評価対象物の中から特定の性質を有するものだけを選び出すことを指します。医薬品開発の領域においては、多くの化合物や微生物生産物などの中から必要な活性や性質を有するものを選び出す作業を指します。

(注8) Kinase Screening & Profiling Trends 2010 , HTStec Ltd, May 2010

(注9) 「アッセイキット」には、キナーゼ、基質、アッセイバッファー、プロトコル（手順書）がセットで入っています。手順書通りに試験を行うことにより、簡便に阻害活性測定をすることができます。

以 上

本開示資料は、投資者に対する情報提供を目的として将来の事業計画等を記載したものであって、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。

また、当社は、事業計画に関する業績目標その他の事項の実現・達成等に関しその蓋然性を如何なる意味においても保証するものではなく、その実現・達成等に関して一切責任を負うものではありません。

本開示資料に記載されている将来に係わる一切の記述内容（事業計画に関する業績目標も含みますがそれに限られません。）は、現時点で入手可能な情報から得られた当社の判断に基づくものであり、将来の経済環境の変化等を含む事業計画の前提条件に変動が生じた場合その他様々な要因の変化により、実際の事業の状態・業績等は影響を受けることが予想され、本開示資料の記載内容と大きく異なる可能性があります。

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

マイルストーン開示に係る事業計画の修正について (平成23年12月期～平成25年12月期)

平成23年8月5日

上場会社名 カルナバイオサイエンス株式会社

(コード番号：4572 JQグロース)

(URL <http://www.carnabio.com/>)

問合せ先 代表取締役社長 吉野 公一郎

取締役経営管理本部長 相川 法男

TEL：(078) 302 - 7075

本日(平成23年8月5日)公表いたしました「特別損失の計上及び業績予想の修正に関するお知らせ」を受けまして、平成23年2月10日公表のマイルストーン開示に係る事業計画を下記のとおり修正いたします。(表中の修正箇所は_を付して表示しております。)

1. 今後の業績目標 (平成23年12月期～平成25年12月期)

【修正前】

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成23年12月期 (計画)	770	△254	△200	<u>△221</u>
平成24年12月期 (目標)	1,150	9	25	23
平成25年12月期 (目標)	1,600	317	333	331

【修正後】

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成23年12月期 (計画)	770	△254	△200	<u>△279</u>
平成24年12月期 (目標)	1,150	9	25	23
平成25年12月期 (目標)	1,600	317	333	331

(注) 平成23年12月期は経営計画に基づき費目毎に予測金額を積上げた計画値、平成24年12月期以降は市場環境や企業規模の拡大見通し等を加味した推計値を記載しております。

2. 修正の理由

(1) 平成23年12月期業績予想の修正に伴う事業計画の修正について

本日別途公表しております「特別損失の計上及び業績予想の修正に関するお知らせ」の通り、特別損失として投資有価証券評価損を計上することとなりました。

以上のことから、売上高、営業損失及び経常損失は前回発表の数値より変更はなく、当期純損失を前回公表計画比58百万円増の279百万円とすることといたしました。

(2) 平成24年12月期以降の事業計画の修正について

平成24年12月期以降の事業計画について現時点で変更はございません。

以上

本開示資料は、投資者に対する情報提供を目的として将来の事業計画等を記載したものであって、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価及び投資に関する決定は投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また、当社は、事業計画に関する業績目標その他の事項の実現・達成等に関しその蓋然性を如何なる意味においても保証するものではなく、その実現・達成等に関して一切責任を負うものではありません。

本開示資料に記載されている将来に係わる一切の記述内容(事業計画に関する業績目標も含まれますがそれに限られません。)は、現時点で入手可能な情報から得られた当社の判断に基づくものであり、将来の経済環境の変化等を含む事業計画の前提条件に変動が生じた場合その他様々な要因の変化により、実際の事業の状態・業績等は影響を受けることが予想され、本開示資料の記載内容と大きく異なる可能性があります。

マイルストーン開示に係る事業計画の修正について
(平成23年12月期～平成25年12月期)

平成23年12月22日

上場会社名 カルナバイオサイエンス株式会社

(コード番号：4572 JQグロース)

(URL <http://www.carnabio.com/>)

問合せ先 代表取締役社長 吉野 公一郎

取締役経営管理本部長 相川 法男

TEL：(078) 302 - 7075

本日(平成23年12月22日)公表いたしました「業績予想の修正に関するお知らせ」を受けまして、平成23年2月10日公表のマイルストーン開示に係る事業計画及び平成23年8月5日公表のマイルストーン開示に係る事業計画を下記のとおり修正いたします。(表中の修正箇所は__を付して表示しております。)

1. 今後の業績目標(平成23年12月期～平成25年12月期)

【修正前】

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成23年12月期(計画)	770	△254	△200	△279
平成24年12月期(目標)	1,150	9	25	23
平成25年12月期(目標)	1,600	317	333	331

【修正後】

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成23年12月期(計画)	586	△396	△342	△423
平成24年12月期(目標)	1,150	9	25	23
平成25年12月期(目標)	1,600	317	333	331

(注)平成24年12月期以降の業績目標に関しては、現在編成中の平成24年12月期～平成26年12月期の中期経営計画がまとまり次第速やかに開示してまいります。

2. 各事業年度の計画達成のための前提条件に係る事項

マイルストーン開示に係る事業計画の概要

【修正前】

(単位：百万円)

	売上高		営業利益	
	創薬支援事業	創薬事業	創薬支援事業	創薬事業
平成23年12月期(計画)	650	120	138	△392
平成24年12月期(目標)	750	400	232	△222
平成25年12月期(目標)	900	700	346	△28

【修正後】

(単位：百万円)

	売上高		営業利益	
	創薬支援事業	創薬事業	創薬支援事業	創薬事業
平成23年12月期（計画）	561	25	72	△468
平成24年12月期（目標）	750	400	232	△222
平成25年12月期（目標）	900	700	346	△28

(注) 平成24年12月期以降の業績目標に関しては、現在編成中の平成24年12月期～平成26年12月期中期経営計画がまとまり次第速やかに開示してまいります。

3. プロジェクト毎の研究開発計画

創薬事業における研究開発計画

【修正前】

ステージアップ数	前臨床⇒臨床（又は導出）			1
	探索⇒前臨床（又は導出）	1	2	2
研究テーマ数		5	5	5
		平成23年12月期	平成24年12月期	平成25年12月期

【修正後】

ステージアップ数	前臨床⇒臨床（又は導出）			1
	探索⇒前臨床（又は導出）	0	2	2
研究テーマ数		5	5	5
		平成23年12月期	平成24年12月期	平成25年12月期

(注) 平成24年12月期以降の研究開発計画に関しては、現在編成中の平成24年12月期～平成26年12月期中期経営計画がまとまり次第速やかに開示してまいります。

4. 修正の理由

本日別途公表しております「業績予想の修正に関するお知らせ」の通り、創薬支援事業及び創薬事業において売上高の減少等により業績予想が修正になることから、事業計画を修正いたします。各事業別の詳細は以下の通りであります。

①売上計画の修正について

1) 創薬支援事業

創薬支援事業の売上高を地域別にみると、国内市場は、本年3月11日に発生した東日本大震災の影響により顧客における予算執行が従来に比し低迷したことに加え、前連結会計年度において計上があったリード探索サービスの売上が、協業先であったOSI Pharmaceuticals, Inc. が買収されたことに伴い減少したこと等から厳しい事業環境となりました。このような中、学術営業サポート等による顧客の深耕等により売上の上積み努めてまいりましたものの、前連結会計年度比37百万円減、前回公表予想に対し64百万円減の280百万円にとどまる見込みです。北米市場におきましては、日本国内において成功した学術営業サポートを米国内に浸透させたこと等により大幅な顧客数増を達成し、米ドル建ての売上高は前連結会計年度比22%増を達成

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

する見込みであります。しかしながら、急激な円高ドル安の影響等により、前連結会計年度比で16百万円増加するものの、前回公表予想に対し40百万円下回る154百万円を見込んでおります。欧州市場におきましては、当期下半期の売上は順調に推移し当初業績予想をほぼ達成する見込みであります。第2四半期までの売上低迷が影響し、当初業績予想を25百万円下回る71百万円となる見込みであります（前連結会計年度比では12百万円の増）。その他地域の売上高においてはバルクタンパク質の大量受注等により前連結会計年度比26百万円増を達成し、前回公表予想に対しても42百万円上回る55百万円を見込んでおります。

前回公表計画の売上高に対する各地域別の達成率ならびに前連結会計年度売上高実績と比較すると、以下の通りであります。

(単位：百万円)

地 域	売上高			達成率 (B/A)	対前連結会計 年度比 (B/C)
	前回公表計画 (A)	今回公表計画 (B)	前連結会計 年度 (C)		
日 本	345	280	317	81.2%	88.1%
北 米	195	154	137	79.0%	112.2%
欧 州	97	71	59	74.0%	121.1%
その他	13	55	29	425.7%	189.2%
計	650	561	543	86.4%	103.2%

2) 創薬事業

創薬事業において、平成23年12月期に1テーマのステージアップを計画し、当社が研究開発を行っている創薬プログラムの早期導出又は研究テーマの探索段階から前臨床段階への進展を達成するべく、製薬企業等へのライセンスアウト交渉並びに研究開発を推進してまいりました。今回の導出交渉の過程において、製薬企業等から導出に係る具体的な条件提示があったものの、前臨床試験段階に至っていないテーマであり更なる試験データの提供を求められたこと等により、当事業年度内に導出契約交渉を完了させることができない見込みとなったことから、平成23年12月期の創薬事業の売上高について前回公表計画120百万円を25百万円に下方修正することといたしました。探索研究から前臨床研究へのステージアップにつきましても、リード化合物における薬理評価試験系が確立されつつあるものの、計画に比して遅れがでていること等から、平成24年12月期以降へ先送りすることといたしました。

②販売費及び一般管理費について

当社グループでは、かねてより事業の効率的推進を目指して経費節減に取り組んでまいりました。平成23年12月期においても、更なる固定費の削減に取り組んだ結果、当事業年度の販売費及び一般管理費は前回公表計画に比し34百万円減の786百万円を見込んでおります。

③損益計画の修正について

以上の結果、平成23年12月期の売上高は、前回公表計画を183百万円下回る586百万円となる見込みであります。これに伴い、売上総利益は176百万円減少する見込みであります。上述の販売費及び一般管理費の削減等により、営業損失は前回公表計画比142百万円増の396百万円、経常損失は前回公表計画比141百万円増の342百万円、当期純損失は前回公表計画比143百万円増の423百万円となる見込みであります。

以 上

本開示資料は、投資者に対する情報提供を目的として将来の事業計画等を記載したものであって、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価及び投資に関する決定は投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また、当社は、事業計画に関する業績目標その他の事項の実現・達成等に関しその蓋然性を如何なる意味においても保証するものではなく、その実現・達成等に関して一切責任を負うものではありません。

本開示資料に記載されている将来に係わる一切の記述内容（事業計画に関する業績目標も含まれますがそれに限られません。）は、現時点で入手可能な情報から得られた当社の判断に基づくものであり、将来の経済環境の変化等を含む事業計画の前提条件に変動が生じた場合その他様々な要因の変化により、実際の事業の状態・業績等は影響を受けることが予想され、本開示資料の記載内容と大きく異なる可能性があります。

本資料は、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価および投資に関する決定は、投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また本資料最終頁末尾の留意事項を必ずご参照下さい。

マイルストーン開示に係る事業計画の修正について (平成23年12月期～平成25年12月期)

平成24年 1月20日

上場会社名 カルナバイオサイエンス株式会社

(コード番号：4572 JQグロース)

(URL <http://www.carnabio.com/>)

問合せ先 代表取締役社長 吉野 公一郎

取締役経営管理本部長 相川 法男

TEL：(078) 302 - 7075

本日(平成24年1月20日)公表いたしました「業績予想の修正に関するお知らせ」を受けまして、平成23年12月22日公表のマイルストーン開示に係る事業計画を下記のとおり修正いたします。(表中の修正箇所は__を付して表示しております。)

1. 今後の業績目標 (平成23年12月期～平成25年12月期)

【修正前】

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成23年12月期 (計画)	586	△396	△342	△423
平成24年12月期 (目標)	1,150	9	25	23
平成25年12月期 (目標)	1,600	317	333	331

【修正後】

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
平成23年12月期 (計画)	586	△396	△342	△364
平成24年12月期 (目標)	1,150	9	25	23
平成25年12月期 (目標)	1,600	317	333	331

(注) 平成24年12月期以降の業績目標に関しては、現在編成中の平成24年12月期～平成26年12月期の中期経営計画がまとまり次第速やかに開示してまいります。

2. 修正の理由

平成23年8月5日公表の「マイルストーン開示に係る事業計画の修正について(平成23年12月期～平成25年12月期)」において、特別損失として投資有価証券評価損58百万円の計上により平成23年12月期の計画のうち当期純損益を58百万円修正する旨をお知らせしておりましたが、本日別途公表しております「業績予想の修正に関するお知らせ」の通り、平成23年12月期第2四半期会計期間に特別損失として計上した投資有価証券評価損58百万円を取り消すこととなりました。

以上のことから、売上高、営業損益及び経常損益は前回発表の数値より変更はなく、平成23年12月期計画において、当期純損益を前回公表計画比58百万円増の△364百万円とすることといたしました。

以上

本開示資料は、投資者に対する情報提供を目的として将来の事業計画等を記載したものであって、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の事業計画に対する評価及び投資に関する決定は投資者ご自身の判断において行われるようお願いいたします。また、当社は、事業計画に関する業績目標その他の事項の実現・達成等に関しその蓋然性を如何なる意味においても保証するものではなく、その実現・達成等に関して一切責任を負うものではありません。

本開示資料に記載されている将来に係わる一切の記述内容(事業計画に関する業績目標も含まれますがそれに限られません)は、現時点で入手可能な情報から得られた当社の判断に基づくものであり、将来の経済環境の変化等を含む事業計画の前提条件に変動が生じた場合その他様々な要因の変化により、実際の事業の状況・業績等は影響を受けることが予想され、本開示資料の記載内容と大きく異なる可能性があります。